



日本系時記卷之四

夏

漢書律曆志云夏の假かり假ハ大なり暑物假大なり
そのさかりの雅よ夏と特明と云〇和氣小なりと云と彼
ハあつと云ふにまかりなり
あつと云ふは暑なり義と云ふ

素問のよるく夏三月これと蕃秀のよる天壤の氣交也
穀也蕃秀夜ふ臥一寐く起せ厭於日志と
て心るるをさるく一先英華と一蕃秀を成一也
天をよしてして世とるるとゆふ心畢く出畢く
進一也と進るるを揚ば夏氣は夜とるるに於て最
長れ送るるこれと送るるに傷るとも收と成
者か一

千金方いづく元々の面をほろろしておろなるを
人として面皮あつて癩をまへ又面風とあつて

又曰又七午二日若くは代食物をまへ辛をまへて
肺平とあつて

内行のいづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ
あられた大に人の目と換へ

若くは福のいづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ
これをいづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ

金匱要略いづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ
死す我を毒者と犯さん宜く苦菜と食して

これと書く

月令廣義いづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ
及水とのむろと忌又あつて鹽滌とく

又いづく元月腎氣衰後とあつて房色をたふ
氣と傷り来と換へ宣戒之

又いづく汗の衣裳よ透りて日お晒し又これと書
さハるゝの癩子とせ

来書書にいづく盛暑熱を徹る冷水をくを洗
すよ又腫と乾枯をいづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ

楚波いづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ
楚波いづく元月冷石洗拍を枕して湯をたふ

又とくふ此暑時を厄れ上に生れとくうす瘧とれ瘡
とせし冷あまを瘧とせす

又曰五月ハ心胆一腎衰小精化して水とちり種小水
凝丸保蓄して陰氣を固と一考る熱物とて
脈中溢暖あり生肌果茹氷水冷淘粉粥津蜜丸含
けり冷乞と食とれハ多クハ秋時ハ必瘧痢とせし
冷水とて沐浴し一面と洗ハ背と淋く事あり
人として暑熱眼晴く脈脈厥逆一霍乱吐筋筋冷
乃瘧とせし此風ハ暑と多しなれ眼中ハ人
志く扇と揮しむ事なう汗体毛孔開展と風

へたりこれと花世ハ人として風痺不仁言枯蹇濕の疾
と熱一む年壯りて即言とるはとせし亦病根
を種あり氣衰方人を標教乃害と瘧とるに
瘧中よりこれとせし

強人よりく夏月肉ハ伏陰有り冷水との瓜推生冷
の相宜くゆ食一かくれとせしとれハ秋冬瘧痢
とせし事とせし

夏月暑ハ傷く暑く身熱たれし瘧とる人有り
これと瘧とせし病瘧より暑と服す
又万病を治す大伴家持瘧瘧人哥

石底百爾五牧申夏瘦尔吉跡云物曾忒奈伎
取食 纒繡至乃反瘦と信する事箇書あり
凡え信し終くげよきこと久し事あり

四月

五月乃節時湖を四月の中○四月此長名孟夏 余月
乾形 徳と仲はし○四月乃和名と和月と云外の也書た
ひつちゆてうれ花月しつと
略せりと異義抄よるえり

朔日 國信今日より四月四日まで 給と恙ゆ人七日と衣
也といふ古言にゆかしくあり

八日 滋佛日あり 灌佛といふ言は佛は是日滋佛と
ある部梁香といふ言は水と前金香といふ言
は色香といふ言は丘降香といふ言は水と
は子香といふ言は

て黄也水と安息香といふ言は水と佛頂
灌くといふ言は彫建れ信する言は洗ふ言はぬ
本朝あり今日佛よ水と信せしむる言は推古天皇
の御言ありとまるといふ

十五日 浮屠の結夏今日よりとまりて七月十五日
よりして終り是と解ふといふ言は九十日安住去て外
よありと本貴新等とやゆ人事とねる言は
たりと初苑家規といふ言は

昨日沐浴

今日梅は先よりとて乃海よりとて梅は

四家麻屋はどえりけいよ妻を稱取て多々又月を
梅敷より月分り形と之く早に信これとさうし日
と云天事よ日也さ時事さハ屋宅と修理して
功多しこれハ磨古典と定役三功とて造休修理と
と取は時行事とのき下四月より七月は勢とせ就
と云二月三月八月九月を中功と十月より四月
勢とせと短功とせと修りとすまひは月比日修り
修りせハ功多ししてたさりのたらひへ一又八月
梅敷とて毎年の事あり信とこれと卯の花園と
ふ又卯のむなりのことあり

八月天氣よど時書畫等と日に物してた他めおと
今一紙又糊とつけささるなるうき梅敷の役乞
とひくもゆきとれハ徴とゆは月合度森よさ
衣服とせおゆりきく梅敷の温帯にひきうさ
りよさうせハ前並廿次とて徴生せす

此月あつとら筆を塩漬所貯へそは先達と書
てこらと書ととそつらよらりあハ坂と一
入桶よならよふ米事もかお並とて書と
うけ並一又筆とぬく皮とそり勢湯とゆひ
睨一徳志と收帳用の付米漬又びとて井の色

去と群あり地羊の塩湯はくゆひんころ湯ふた
一と一と丹家地用いふなり

六月十日(ふ)ものまま大豆。赤豆。胡麻。胡荽。葡萄。等也
純陽乃月本をまの精氣を保養して(お)世すなり(次)と(夏)

廣義のいふなり又六月暴怒して心(を)傷事(を)する也
これとゆりせハ秋必瘧と(う)まふ又(水)や(く)面と洗

ひ(す)く(事)と(い)ふ

夏月(六月)味丸と服せ(六月)より始(く)の(む)し(一)男(林)集(意)に

去(夏)を(腎)氣丸(う)り(終)一(又)夏(ハ)地(黃)丸(と)服(せ)一

冬(ハ)味(丸)と(根)と(う)り(一)と(う)り(一)味(丸)腎(氣)丸

地(黃)丸(ハ)一(分)中(一)物(あり)ハ(味)丸(ハ)去(味)丸(に)滋(子)肉(桂)と

か(ら)り(あり)又(薛)直(師)の(學)業(に)加(減)ハ(味)丸(ハ)去(味)丸(と

肉(桂)又(味)丸(と)か(ら)り(一)の(あり)能(氣)熱(湯)と(なり)と

治(す)蓋(運)經(生)の(か)ら(り)と(去)味(丸)より(切)文(大

なり(蓋)生(家)久(一)を(根)と(う)り(一)と(う)り

六月乃(去)候(才)一(蠟)燭(才)二(磁)埴(出)才(三)玉(凡)生(才)

去(夏)の(二)候(才)一(才)口(苦)菜(秀)才(又)靡(草)花(才)

去(麦)秋(五)太(少)酒(の)二(候)あり

去(夏)屋(五)十(刻)十分(夜)字(十)二(刻)五(十)分(小)酒(屋)又

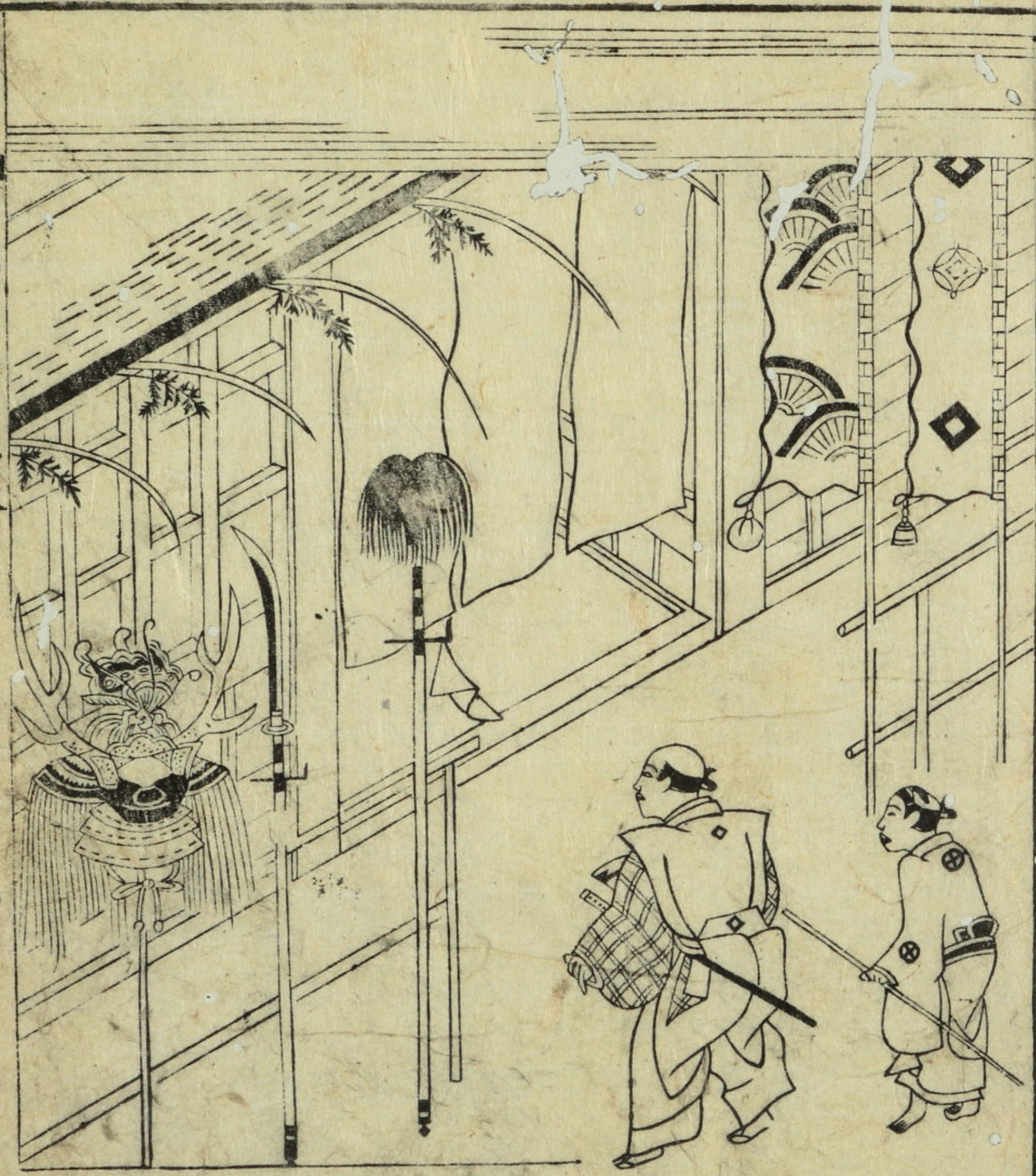
十(刻)五(十)分(夜)字(十)一(刻)五(十)分 (月)令(度)氣

總一これ二物を按察乃せらるる所ありとあり
今日糝と食ふは此の意なりとて一月令廣敷
し屈糸う姉名いこれとほりて屈糸と申ひき
あつたえり又糝と魚鬼よりこりた魚の筋ら
切てこれと食ふハ鬼と降伏する義ありと其俗
晴明之儀より見たりかうやその儀は子にあり
飯ありはう飯用とるにこりや周をう風乾よ
りからまの荒蕪とてく徳糸をつつと座けりて蒸て糝
これこれ湯湯お包裹とてつとおん包敷せざり
こころとゆりあまあん正夜といす五月一日生すあま湯

包敷とて
多敷せす

又葛湯とのむ事案時雜記の午
日葛湯とてぬる緒乃とてく一お細糸して湯よ
うてこれのを火の湯氣と助き年とのふや
その正泥丸節の葛湯よりとあん年節あり
およ葛湯は酒煮酒煮

○又のう一を今日薬とて葛湯よりこりたお新
十種くうりと色色れ糸ありそのてひちよあか
るゆりおちやまきと典薬察あやめつととと
又糝と御膳よりこりて餅餅あつた事
ゆりしと也
延喜式事根係るより又糝と也
糝よりゆりしとみえり



搗すふ風俗通より日五日五線乃糸よりして
脅にかけられい舌及鬼と遊人をうけて瘧疾とや
まがごとくむ一名を長命綱一名を色綱一名を
纏索といふと載り又提綱一名を小人搗午と
雜線といふと合款と結ひ糸を纏る纏るとりか
つて是を糸とす

○又世傳より今日若湯と用く沐浴とるよりあり
搗すふ大裁種より五月より日若湯を沐浴せあり
楚辭にも浴若湯を沐浴と云へり今世人の若
湯と用く沐浴とるより是を風をうけて

○又今日婦人女子たりふきよき湯と浴よ挿之又
斷ふすとふ如此とれい病と瘡くと俗よりいふよりあり
案附新紀より端午より日若湯艾と刻て少人形と
形り又を葫蘆の形にこくこれと帯其の形
とて辟と祀せりかゝる俗より王折る竹を
いへり明和知是天中節旋刻當房要辟邪
又案常考より竹より玉燕叙臥艾虎輕
○今日京師に若湯乃竹を焚くあり邪友七日の節より
潔斎として系ありを敷て十疋朝日より乃是と云
るて一二の者と定めぬ日より糞米と云へり

二つよりさうして勝負乃本としてる場乃西の首に楓柴
 有り乞よりわざと落しつゝと葉とをれりと見すす
 拙れ法々群集とを次故よる坊にありの西せして
 大方の柵れ樹よの有りてんやまをぬらるるなり
 時は極数を家の立何なりまらものい坊にありに
 多しあるさうり杖をつててさひりりもくたせまの
 乃るにさうらに群集れ中へけとあがらん
 ころ竹杖とつたさるる乃路よりさうらよなるを打
 たつまらるるをたつとさうらに張のあひりりて
 横にまれ葉のあちちとあつたさうらとさうら

鳥よありまうさうさあをあり又人る川中まてり
 けて川よとち衣裳とぬしてさうらも有りまひい
 潔斎とをたつとさうらとあつて客人の探たるより
 さらりありす落るるさうら元聖の村民社人
 なすりありあつたさうらとつたつたの火とさうら
 我れ此火とを人よりさうらとさうら探れとさうら
 ひりの大回故徳殿にさうらに競る騎射乃事
 有りてみ位にさうらとさうらと延喜式よさうら
 花多御情よさうらとさうらと天宮あつたさうら
 ころ路とさうら殿に御幸有りて六府騎射乃事有り

里付落記板と曾此形よりなる者菰の葉に似ると
仰り或木と菰の力のそくさつをまゝして戸部より
仰り一の五年の風信美巧とあるを本とあつて
くされ形と云ふを又入りこらして案文をなせり
或甲冑と云ふ世紐戦ともいへば我閑乃勢をなせり
然るに戸部よりして仰り乞とかがとくふ又紙筋
ひらく乃筋と云はれと云ふ事一よつ事是とも戸部
たゞ仰りこれとのやいと云ふ或筋と用りも仰り或
長菰をかきて乞と快をうと云ふ親目より又百
て受書此昇事と云

梅桑の記をろくろくもこれと仰る事仰り案文
雜記めいそく場中ふ抄の人天師を盡て削り
又其そく天師を仰り其そく削り藤と
そく書一門よみ至又其そく採結して人乃
形に他のつ戸乃よまかかれの毒草と仰くと
とり 梅桑の記をろくろくもこれと仰る事仰り案文
雜記めいそく場中ふ抄の人天師を盡て削り

○今日まありせり事仰り 荆楚案或記より
又日四民後よ踏百草又百草と闘しむる乃教
ありと云ふせり云うれはより一より五なる事
日本紀よ案猶と仰るも 章教の帖玉に百草の闘香草
これ事と仰り

又章芳云り誘又今朝團草の宜男と有り誘ふり
 團草乃竹小昔團今物味及益種百多者こり
 百草の汁と持より整と膏と膏葉に記を
 之と百病瘡症と腫して考の膏葉と功十倍
 せり又今朝日味者何百草と持汁とつと出
 石原と和志と餅と陰乾と一切乃金瘡と治
 じと月令唐義又凡えと
 百草と取と牛膝浸漬百草
 葉と煮とすく常信記書略
 凡えと牛膝を脂と煮て汁を
 百草の汁と持より整と膏と膏葉に記を
 之と百病瘡症と腫して考の膏葉と功十倍
 せり又今朝日味者何百草と持汁とつと出
 石原と和志と餅と陰乾と一切乃金瘡と治
 じと月令唐義又凡えと
 百草と取と牛膝浸漬百草
 葉と煮とすく常信記書略
 ○夜集草と之と丸納の日なり又艾草よと丸納む
 五月五日 凡艾草と上とと端午と丸納むとす
 五月五日 凡艾草と上とと端午と丸納むとす

と但艾乃苗なりとけさるなりと穢之丸丸英の
 乃とさるなり方にうり艾を佐多とす(又標対の
 之れ用かひされも使使もさの性なり又紫金
 總生金丹艾金錠子と合のりおを今日より
 ○又今日慧液とる事有りこれ原ととる小遠之
 方乃一葉何記とさるせり
 月令通考云地地とてて
 汝越と句越と始とてせり
 石屏り踏午乃後よ
 榴花角黍舊時新竹慶とる酒樽堪笑江湖
 老詩客也隨蒿艾上米門
 又 友人
 滿榴花上滿る百寸切草露浥濁醪今日猶留
 五

受為^{ちよ}天痛飲^{たのしみ}漢雜^{わんざ}強^{きやう}

十二月以日竹と後栽へ一書^{しよ}書に五月十三日と作^{しよ}碎^{さい}
照^{しよ}とす又作^{しよ}迷^{まい}日^{じつ}もいふこれ日竹とうゆといふか
羅^らの活^{かつ}とあつなり

晦日 休活

は月^{げつ}淫^{いん}女^{にょ}なりこれと梅^{うめ}とつづく又^{また}微^い女^{にょ}もあなり
梅^{うめ}西^{せい}代^{だい}中^{ちゆう}胆^{たん}の芙蓉^{ふじゆ}石^{いし}梅^{うめ}梅^{うめ}枕^{まくら}たもの枝^{えだ}とあなり
て^てた^たりし月^{げつ}令^{れい}度^ど義^ぎよん^んえ^えなりは^は時^{とき}其^{その}ま^まなり
つ^つ一^{いつ}蓄^{ちく}菽^{しゆく}水^{すい}梔^{しゆ}を^をた^たせ^せと^と甚^{しん}く^く活^{かつ}又^{また}象^{しやう}象^{しやう}人^{じん}功^{こう}を
と^とた^たせ^せと^と奴^ぬ僕^{ぼく}事^じと^と廢^{はい}し^しか^かこ^こし^し十八^{じゅうはち}の^の家^け事^じ調^{てう}

り^り一^{いつ}梅^{うめ}西^{せい}代^{だい}中^{ちゆう}胆^{たん}の中^{ちゆう}も^も流^{りゅう}僕^{ぼく}を^をして^{して}薦^{せん}と^とあ^あん
履^りと^とぼ^ぼく^くし^しひ^ひ一^{いつ}薦^{せん}を^を書^{しよ}籍^{せき}恙^{しやう}拍^{ぱく}食^{しやく}油^ゆ等^{とう}と^と胸^{きゆう}
新^{しん}又^{また}裁^{さい}し^しる^る草^{そう}木^{ぼく}菜^{さい}蔬^{しよ}よ^よち^ちの^の場^{ばう}屏^{へい}を^を葺^ふゆ^ゆ
を^を功^{こう}用^{ゆう}意^いし^し又^{また}梅^{うめ}西^{せい}代^{だい}中^{ちゆう}胆^{たん}の^の貯^{ちよ}至^し至^しと^と勢^{せい}
と^とれ^れの^のた^たれ^れつ^つま^まい^いなりと^と茶^{ちや}湯^{たう}に^にた^たえ^え下^げり^り但^た日^{じつ}
と^として^{して}た^た然^{ぜん}り^りと^と又^{また}梅^{うめ}西^{せい}代^{だい}中^{ちゆう}胆^{たん}の^の癩^{らい}疥^{せう}を^を治^ちへ^へ
る^るれ^れあ^あの^のれ^れ一^{いつ}樽^{そん}と^と他^たの^のよ^よこれ^{これ}と^と用^{ゆう}色^{しき}の^の費^ひし^し
や^やと^とく^く衣^い衣^い何^{なに}か^かよ^よこれ^{これ}と^と用^{ゆう}れ^れの^の灰^{はい}け^けの^のま^まし^し也^や
新^{しん}垣^{げん}り^り食^{しやく}物^{ぶつ}を^を受^うけ^けし^し見^みえ^えなり
梅^{うめ}西^{せい}代^{だい}中^{ちゆう}胆^{たん}の^の説^{せつ}終^{しゆう}と^と一^{いつ}決^{けつ}し^し冠^{かん}と^と屏^{へい}等^{とう}を

とて岡人喜友の後唐より日と入梅す一芒
推代後壬午日と出梅す次神楨にもとて芒
種の後丙に日と入梅す一芒の後に
よみ下日と出梅す又碎金銀よとて芒種
乃後壬午に日と入梅す一芒と乃後唐
丙午日と出梅す又孝時珍う後亦芒種乃
後壬午より日と入梅す一芒の後に唐の
日と出梅すは元梅西よとて芒種の後丙の日
南と入梅すすは是より一芒は唐の
衣依羅よすの諺ありと日と入梅す一芒
の後に唐の

ゆふ夜を小はるく乃後唐の
況合一換軒嘗若微雨候いとて流湯之性来國
有部物とて天候は依り空化は移るを思風を之
候候は速に拘ひ日敷御刻梅出入之功雖も
舞夏も書恐ふの候候。置ふ由書不申書候
此言平の芒種は後唐の初降之日乃入梅は唐の
新日は梅庶芽字其不差矣十月迄は唐の
世に書及生乃とて日と入梅す一芒の後に
乃申より十一日とあり日と入梅すは日不津といは不
犯淫然不念又幸洒肉日なり

梅と瓜の蜜菓子乃抄に摩耶夫人の中陰は赤布なり
此の菓子とあり菓子とのごとく作り予り
中夏生六廿二候乃内なる才三候なるは
陳金にて蜜菓子を作らる

夏正の日井と後水と改れハ瘧疫を和まはと瘧此礼儀
志よ見こり又夏正乃後雨丁は所より日まぬの交
と改れハ古にありと千金方にありたり

は月乃初書梅と丸皮とをり核と去糖よ入火より
けり煮く後收用く鳥梅は皮ありは時をく取
へ又梅つる梅りをも製法へ

は月米苞を改米ぬへ一焼くハ苞ゆりめハくす

生は又及乃呂拾穀乃原と多く米苞にぬり煮ハ不虫

は月天楯中形もよ煮一異月のくを何りくハ保をすへ

又梅子と深醬と一核致餘論よとく古ハ於及不稻

宥白漢味競く葉く於老護也保老金水二膳正燠火土
之胆尔

月令よとく是月也日長正陰陽氣死生分是子春戒要必

掩刃母澤山考色母或進舊滋味母致和節者欲定ハ氣又

曰是月也ハ居之剛可ハ毒胎室ハハ升之護ハハ生ハ毒附

心體よとく氣月板井及深寒乃中よりりりかられ毒

切引先雜代毛と云々その中にとくく入るよるは毛
旋舞するものもとれりこれ毒ありあり

此月遊とくく入る力より一と目を挿す金匠番職よ見
より又煮餅鯉魚雜及未熟せざり果とくくぬきかれ
鱈と鮑魚とおれどく食へくは又枇杷と炙肉塾麩也
おろしく食するなる月令度義考書に云々千金方に猪麻の肉
と食するを又金匠番職よ又六月泥中の傍水と
飲るべし魚鱈乃猪肥肉にけり乞とのめば瘰癧なる
は月農人の田に苗と挿へ又圃に大葱乃たねと
ゆへ一翌日よいさすとちりて

又月のち候才一控娘生才二賜始鳴才三及吾女才
右芒種れ三候あり才四麻角祥才五際始鳴才
右半夜出右るる玉乃三候なり
芒種至右十刻二十分夜三十九刻四十分夜至
右十一刻二十分夜三十八刻二十分月令度義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○右月の長名 季夏 月 伏
御を極終るいふ○六月乃 長名と云夏月といふこといふこと
てまこといふ事くれつさくろくゆへ
三ヶ月一月のいふと略せらるる

朔日賜冰節と云つく今日氷を食するけり梅とあり
仁明天皇れ右十二年又月に額田大中皇皇子團鸕也

しつ水のわづらひ出給ひ申ふよる降中と云やう
給ひし久廣唐と給りしやうなる所有り人紙
つらして凡を給ふは唐ありと申す何れのふ
何れに侍り人を給して問せ給ふは氷室なりと
申すその氷といふやうにして納むらうと問せ
給ふ答へ申すさそと一丈餘のやうく草と云ふ
もに草蓋はととありしそ氷と給ふは氷といふ
やうなり大旱もさけと乞と云く契月と用と
あるそ何皇子の氷をに注帝も其せ給ひ給れハ
をぬる唐感ありし一日幸給ふのそり乞日本

あま氷と申す初ありそ後より季みこもこれと
細く團と申す氷室と給れ侍りしありそ此世まで
丹波のそふは氷室有り多るとも又富士の御者
乃天のそふも氷と給せしあり民間にハ
蕉腕製せし粒とたくり之を今日食して氷と云
らふに準す

りろくしそ氷とおさひの事あり周知に凌人
職と云ふ氷室とつらさるるなぬり去るは極き
不深に迷答なり氷室と云うそ乞とおさめ夏
いぬく暑事とさけんそあま氷は出して降給ふ

つらち初毛詩二之日整冰冲三之日納之凌陰
 とより大徳小日在北陸而為冰而陸羽觀而出之
 とより是氷氷公也之史之出ひるをといふなり晉
 乃石季龍三伏の日氷井者於氷と云く大陰
 阿之ーる鄴中記よりなり
 六日神麴を製する日あり製法ハ如前ナリニ詳ナリ
 今に記し及り

十六日けり如きことありあり秋林紅葉始と云くか
 ぶらハ嘉祥と云記く仁明乃と云く之取和の比を
 河代乃と云く之をいふと云く一毎哭哉とのい

年乃と云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 了と云く十月十日と云く之をいふと云く一毎哭哉とのい
 かりと云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 丁嘉祥と云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 たりと云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 よの傳り又と云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 大指乃何と云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 一毎哭哉とのいと云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 丁嘉祥と云く之つていふと云く一毎哭哉とのい
 宋乃寧と云く之つていふと云く一毎哭哉とのい

錢は元平より十三年までの事。一は十三年後河
に老く今日一人の事あり。その後、後、定むる事
右代中後たり。あつされたるあり。あつこせのほ
今據と傳は四事物語乃後よまゝにその事あり
ある事。海よ久したる事あり。あつされたる事あり
江島守事。根底年中にす。あつこせの事あり。あつ
まゝ。國史もあつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり

晦日 沐浴 日 月 事 あり 世 後 回 事 あり

そは、秋の事あり。たつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり

乃 圓 如 の 事 あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり

あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり
あつこせの事あり。あつこせの事あり。あつこせの事あり

集りて、あつこせの事あり

あつこせの事あり

とのひらたを足らぬに中夜に中夜に
 ちとせきまのこゝろをみたり月も同月
 のりぬふらにわむわとよは後代も月もあつとよ
 幸楽屋の丸をとり又今日川原にゆく麻生
 人形とゆふあけなすてまるとまて川原に
 とせきま

川原にゆく月夜に
 小なすてまてまてまて
 ちとせきまのこゝろをみたり月も同月
 のりぬふらにわむわとよは後代も月もあつとよ



三月五日... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

九月三日... 十月... 十一月... 十二月...

三月九日... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

梅屋敷の後書と日又物とへ一紙薦よひる者表
 紙とよんで於て帯繩の無く物をい表す物す
 天氣ぬりありとも一日にて夜たり一紙より物
 一午未だは收む晩より暴風の受りしや夜
 此下一屋下よりあつて熱をさす一紙きて明
 初めに細い尺書と物とす一紙より多物とり
 らは暴風のさすやあつ又多まれの赤ぬ麻ひ
 儼々心と用ひす書とすこもふる何の換
 あつて修繕一紙よりとら糸と物ひ縫と古故の
 一紙換の中に納書と心とせしと書と用ひ

屋中に久しと晒さへりかたはく列り一紙晒
 たりり書とすは溼るく志くす一毎年久しとせ
 ともいさう書代換場あり一古人を書と物とせり
 と心とすりもえと色とすの表紙も表すと下よ
 と心とすりもえと色とすの表紙も表すと下よ
 多に多く書と用ひる書とす今八七里書二
 也なり
 此書は書ハ山懸れりや書ハ又ふ物なり書ハ書ハ
 乃より細ハハちやちやして
 又齋書と書厨の中より入るハ書ハ
 何く一はは揮毫を角くも又す

圖畫墨蹟をとり一時許り日又物とへ一紙と書と薦す

淨紙を紙芥子のよに染へ繩よりけ半にひきま
 けし久く晒すくは圖畫のうもをまよし表
 とさすへりひもまよひんか紙とまよひろく
 たりとまよし一物よまよし力と能やまよしこれ又
 如母とれい染とまよし 道里八般よは四月のら梅色のあま書
務衣服まよとまよまよし一書ハ第一入
ふいとまよし畫圖衣服まよくはくく封してまよかびおま
梅色にてはまよし又圖染よまよされてまよひつらまよことつら
 甲冑もまよし布もまよし布とまよしひて中付とらと晒す
 晒すくく久く晒すくくする下は梅色無氣と先
 して後雪白とまよし細く

衣服を晒すくく一芝原の久くを干くく又黄緑紅色

かみの色はむらむら梅色日よ晒くすこれと晒せ
 久く晒す物影おまよし又月衣乃のひて色つらつらと
 ぬれのけまよし一晒すくくを痕まよし枇杷のまよを
 すりて細糸して洗へまよし晒すくくすり丹家玉周
 を梅色まよしむら衣服とハ梅色とまよして洗へし
 わり又丹家玉周まよし凡衣服乃まよし洗へまよし
 仕大皮と細糸一襦袢とまよし合せまよしれらよ
 ひ晒すくくも温湯とまよし洗へてまよし晒すくく後
 洗のくく一又新天南星とまよし絹のけまよしこり水紙
 をまよしれらまよし又白梅とすり洗へてまよし晒す

煮られたる衣服と滑石天竺粉若等分を煮て
 付粉煮たる時又煮し五夜を煮しして自然又
 汚らるる上坪粉とひ移りけ換煎汁とこれと
 のをいれしより又煮て用て洗て色すし添
 上げ煮たる衣服と洗よの杏仁胡椒等分を合
 研爛して汚らるる衣と搗き淨く洗ひ白濁又血
 汚らるる衣服と冷ぬる水と煮し白濁又血と洗
 茶葡萄乃煮汁又白濁濁を細末して水に
 入れて洗へ白くならむいよ居衣必飯
 割さいこまきる葉やくちの種を包つて包つてちりて白とひく丸
 目ふあてし晒し一は日ひ海うみ子この葉はいももく日ひ一ひ平ひら下した
 千金方せんじんぽうに云く葉とさして日ひの平ひらとが丸まる葉は力ちから
 うとくならむ事こと、南みな州しゅう用ようひさる葉はハ割わり日ひ一ひちり
 新あらた瓦わ器ぎ入い土つちおこしは紙し一は用ようひさる葉はハ割わり日ひ一ひちり
 又また好このま一は年ねんをあれま新あらた一は日ひ一ひ平ひら下した丸まる煎せん乃の
 葉はもぬぬびび上うへ一はとくとく元もと世よ代だい人にん葉はとと膏こう一は貯たくわへへ保たも
 護まもられる事こと葉は瓜うりたた事ことをありし葉は丸まる人にんを
 煮ゆひひ病びやうをいれれ物ものをいれれ煮ゆてて收おめめたたくく公こう家け造ぞう
 乃のぬぬままぶぶららゆゆいいてて性せいとと陰いんつつ角かく一は日ひ一ひ平ひら下した丸まる
 入いりりたたりり新あらた靴くつをあららゆゆをあららゆゆとと入いりりてて洗せんひひぬぬ

目ふあてし晒し一は日ひ海うみ子この葉はいももく日ひ一ひ平ひら下した
 千金方せんじんぽうに云く葉とさして日ひの平ひらとが丸まる葉は力ちから
 うとくならむ事こと、南みな州しゅう用ようひさる葉はハ割わり日ひ一ひちり
 新あらた瓦わ器ぎ入い土つちおこしは紙し一は用ようひさる葉はハ割わり日ひ一ひちり
 又また好このま一は年ねんをあれま新あらた一は日ひ一ひ平ひら下した丸まる煎せん乃の
 葉はもぬぬびび上うへ一はとくとく元もと世よ代だい人にん葉はとと膏こう一は貯たくわへへ保たも
 護まもられる事こと葉は瓜うりたた事ことをありし葉は丸まる人にんを
 煮ゆひひ病びやうをいれれ物ものをいれれ煮ゆてて收おめめたたくく公こう家け造ぞう
 乃のぬぬままぶぶららゆゆいいてて性せいとと陰いんつつ角かく一は日ひ一ひ平ひら下した丸まる
 入いりりたたりり新あらた靴くつをあららゆゆをあららゆゆとと入いりりてて洗せんひひぬぬ

口より対し一をくしやふれハ久しくもて之を
くせは是事とたふしの良法あり地味白芷を極
羌活シラカネ川芎カネ神麴カネ黄芪カネ甘草カネをくハ時々晒されハ出
くし物たりも能く志むくし候ふかれ氣味
とくたりの也なり

善治も極くそのハ失く晒すくしすた扱ふし
くし物代都日よ晒すかれきくし日よ晒す
今乃壁に懸くま一し事とも稀はくぬくま
あよりけきくし一も中よりくし日よ晒す
くし物かれの製すは事乃物き深くくし事なり

物中五文の五倍子カネ神蘇カネとて考深く候事なり凡
事と收りす事候ハ黄芪カネの整湯をくく軽粉と
懸く事候しひくし攪くと終くこれと收む久し
と終くも攪すハ石ハ川椒カネと黄芪カネと製しこれ
汁少く松樹カネ事とくし事候と深き又丸より
潜確カネ事とくし又巡乃汁黄芪カネの汁をよ
浸し候事とくし又久秋乃月事候
横切カネと入るハ極く凡事と候しハ整湯より
月入るハ製し候事と候事と候の上よ
ハ一常候と候すと農桑カネ候事と候事又生

魚羹食をこしと井中よつろけしときい搦せ
月令廣事よりきり又月令生肉とゆりし麵を
うぐりてこきおこ間とろわ中よつろけし神の中へ入
るハ之として指を以て餅とてして食くべし
此の酒よりとて又臘酒味を新造するは魚酒
と濁し是に格きす

又月よ煮しはら菜とておこしとけい味をわく煮て
性有りくはら酒の又煮るべしとておこしとけい味を
ふ強とけい酒の中よとておこしとけい味をわく煮て
ひらやとてはら酒の又煮るべしとておこしとけい味を
わく煮て

酒を少くおこしとて

此月の林より出まふ酒とて多し
成野一山林を以て
おこしとておこしとておこしとて
おこしとておこしとておこしとて

粟丸と多煮とて蒸し一脯とて

○乾丸とて一らゆり法 丸とて一らゆり法
丸の片をこれの丸八九分を塩と入一板押しとてけ
おこしとておこしとておこしとて
久しとておこしとておこしとて
後ほく

○凡と糟淹よるは 世俗よちうつけと云凡と云
 母より子孫と云くうらとこそおちひてお氣
 乃才記やうよかえう凡乃片まれの肉よ塩かめ
 入凡乃つくるお分目を入桶よ入すくとて依
 つけ二枚おれと云かーを塩汁とておひて塩汁
 乃かきくおちく日よおーさく凡よ糟を多めぬけ
 世よ凡入才て凡のつさあぬやうにしてるれ
 又よ塩と云おれあひてふくくは云さる糟よ塩ぬ
 せよくうー大抵糟を斗よ塩め合やとせよくうー
 糟多く凡とてたがく凡多く糟とてたがく

俗の瓢たらいようすに凡と云之ー凡おかきとつくるもが
 せとて凡の口より風ひぬやうにおもてとて
 煮よおとぬりぬきー桶をひらきぬ凡のせえ
 せよつけろくくー桶よつあつとてはひ
 男よよとてぬきー凡ハ云凡くうらつてつきて
 くのー又紅豆あずきおとせよー二枚塩よつけるおと
 うけくけとて糟よけくれハ種たねをとり
 瓢たらいおとせと干抱かかろーお塩淹よして貯たくわえー^中
 ○乾瓢乃製法しつぽうのせいぽう好天氣とてゆふとと皮と
 多しとて糟よ切を切らと各うすく（ぶぶまりて

あまへにせし後糸を以て繩よりけしむるなり
天竺の糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
繩よりまじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は

○糸の製法 糸を大糸の糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は

○乾茶の法 日干茶を以て糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は
まじりて糸はくわつたのくく水に入天氣好時糸は

○茶の製法 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶
大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶
大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶
大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶 大茶

の大をこきとつりて蒸し薬したる時細末のを粉
 と拌せ土をまよ入粉せき糲とるにそて麴麩の体
 一斗一日毎に蒸かして厚く切らる 白虎 これ七喜也
 合大蒸すと灰とて口合の塩を合せ梅を入抄をけ
 一夜蒸明りよとあつらふと麴をひいて瓜茄子を
 抄かきかきせき梅を入とてしめて抄りしとよく
 うけ至毎日一斗なりはせ十日許まで後苗考
 之種皮の細糲を蒸し糲と能やとよ切く拌又あの
 一とくあつらふと一斗までしめて至毎日うとせ七日
 まで用へ一三四十日よ及ハぬ味つくまり後又かり

五條いんぎょう丸人乃好まふなり

○蒸年醗の製法 醗く酒と等しく合せ蒸す
 堅く口とあつらふは月去月乃中壺あつらふ
 糲日よ胸一七十日をこきこれと用ゆるの
 たるやと酒と水と等かつ入毎夜あつらふ
 又あつらふ方は醗くしあつらふ又蒸す乃蒸す
 入る入るの蒸すをこきとるゆへ蒸す
 目利よと時梅をよ換壇したる壇壁と修理し
 海龍乃宅を早とる時并と造る玉泥ととよく
 他沙を入へてあつらふ水に氣味さよよくなり

凡暑熱乃時移會と保赤りて僅て熱退るる事あり
 毒也保元より六月に入房勝熱毒膏旨又毒入
 りてく夏内陰氣内伏一暑毒外と毒すんて
 甘く風をわたり冷物と食ふある暴熱吐瀉と生れ
 暖有り物と食飲して大に飽る事あり
 園菜花菜よたのりよとむみまると濃くは寒気流し收
 て多うもよ濃く一日半の暮一は河水とそい
 冷變お通て和弁たよ栂と月令廣義は乃えたり又
 老圃乃云物と味をさめしる用ありと濃くは飲り
 濃くよと但暖くおろく濃相ふもや濃く

月令廣義より六月は栂楊よ水とろく和土とろく茅
 乃原羊の糞と糞之は夏多し
 秋の比颯風吹取ふくはろくくも物とを栂と
 固く一茅を乃栂と堅くと一又栂栂と物と
 比月並と食は目と昏す羊肉とく一神膏と傷り
 聖鳥厚鷲菜羹と食りて忘又生薬と食は水瘧
 とする大のおよ噬るれは終身患とすれ冷食とすれ
 用し冷水生破果油膩甜食とる食する事あり
 凡蒸炒燂炙乃厚味皆宜くわく用し
 凡食乃甘瓜とる食する事あり瓜のありて沈

夏のハ大に毒ありし月令廣義より見たり又曰く双
 蒂乃凡人と殺又油解と也凡く之食する物類に
 感志は此ハ白梅とゆく輝と何まハ凡と命一之後
 白梅と食一又麝香をよく凡と消也又石脂
 魚と炙食するハ能凡と消して水とを以て之を治す
 六月乃六候中一温風至中二蟋蟀居壁中三鷹乃
 學習うきまをす 大小暑乃三候なり中四腐草為螢あきやち 中五
 土潤溽暑ていつくあつ 中六大雨時行あまのふり 大暑代二候なり
 小暑昼亡中刻二十四分夜二十九刻四十分大暑昼五十五
 八刻二十四分夜四十一刻四十分 月令廣義

土用とちよう 又土王とちおう 又土王とちおう 又土王とちおう

春ハ木旺一夏の火旺一秋ハ金旺一冬ハ水旺す
 五のりうら土ハ四時よわゆるわゆる事なり
 春よ完れり位から春なり氣あくる一て四時乃
 初より辰未戌丑月的事一ハ寄胆をとり各
 十日一年よとく七十二日あり此七十二日との
 しく時を木火金水を又各七十二日つて一毎
 一年となれとるはよ土を木とせりる在り是れ土
 用ハ也なり秋の土用ハ土衰老一て感なり一冬
 乃土用ハ水と木とれ是れハ也なりす是れ土

用也火と金と此乃よりま火よませりるあるは
の五月と云く一と土まればすすきとく金を生ひ
あり秋乃金と土より生するなり事此月を火金の
るあり又一案乃中なるれ中央の玉一令を
さくは揚くぬりの席とがひ乃とあり月令あり
事なれば中央の玉とのきり
我國係土用の百月と
よきありと云れり

信説又六月七月は入口舞及赤少豆と金とハ痘瘡と
群と今の人れよくさる事ありされハ保民物終
乃事本は甚くよこおちたやうやくと云りす

信り宝珠の信よきうやくと舞ありとありハ
下りまげりるなりと志と事とさるれお後と志
群のちあつたは種改つとく芳人四月は食五卒
以群厲氣信種葱韭蒜薑也又肘後方に元日及
一日麻子小豆各七枚と春を疾疫を消すあり
これら案初のまかなひ事と云えり物あり
事と信くあやまりて六月はすりやね抄録
人よるあり

六月七月の月令は驚とさる塩と針等と一
滋養ト

血乃久しきやまぶるく用とく正れつて強行のまき
^{ひら}襲えたり病人の用多能^{こころ}為^{こころ}嘉^{こころ}と^{こころ}強^{こころ}し^{こころ}用^{こころ}のま
^ま未^ま強^まし^まく^ま強^まて^まし^ま

目左集時記卷之四畢

